瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター
西条ステーション（農場）の紹介と将来展望

技術センター　生物圏科学研究科部門
積山 嘉昌

本農場は，平成 15 年に大学院生物圏科学研究科附属瀬戸内圏フィールド科学教育研究センターの陸域フィールドを担う西条ステーション（農場）となり，(1) 生物圏科学研究科の大学院生のための教育・研究のフィールドとして，(2) 全学の学生のフィールド体験教育の場として，(3) 中四国のフィールド教育・研究の拠点として，(4) 地域市民に貢献できるフィールドとして，これまで以上に大きな期待をよせられるようになってきている．

西条ステーションは，大学キャンパスの東端に位置しており，鏡山の北側斜面に，放牧場，牧草地，家畜飼育施設を有する，家畜生産を中心とした農場である．総面積 35.1 ha の敷地の中で，乳牛と肉牛を合わせて 110 頭，緬羊 40 頭，豚（ミニチュアブタ）20 頭を飼育している．特に乳牛に関しては，搾乳牛（実際にミルクを搾っている成牛） 30 頭規模を実現しており，近畿・中国・四国地域では唯一の酪農部門を有する大学農場である．さらに西条ステーションの大きな特色は，キャンパスから徒歩圏内（車で 5 分，徒歩 10 分）にある大学に隣接した農場としてフィールド教育及びフィールド研究の場を提供している点にある．

センター化後，従来の授業科目に加えて，センターがコアとなった授業及び実習科目が新たに開設された．具体的には，大学院生のための生物圏フィールド科学演習 (A)・(B)，生物圏フィールド科学実習，全学の教養教育としてのフィールド科学入門，学部生のためのフィールド科学演習が，西条ステーションのフィールドを存分に活用して実施されている．また，教養的教育科目である「大地と家畜からの恵み」は，草と家畜と土の循環の中で食と農業のつながりの重要性を全学の学生に体験させるために，センター化以前から 10 年間にわたり実施している食農教育の一環である．

一方，フィールドを重視した研究をテーマに，食の安全・安心，持続的な家畜生産活動，農業と環境，家畜の健康と福祉，人間と自然との共生等，様々な研究も活発に行われている．

また，地域に対して開かれた農場を目指し，年間 1500 名の見学者・実習者を受け入れるとともに，毎年，開催している農場公開事業「農場祭」でも，農場を市民に開放し，食と農の関わりについて啓蒙活動を行っている．さらに，フィールドセンターが企画・開催しているセンターフォーラムでは，毎回，地域に密着したテーマを取り上げ，地域住民の参加を積極的に受け入れることで，地域貢献に取り組んでいる．

以上の教育・研究活動及び地域貢献に対して，西条ステーション技術職員は今後とも積極的にサポートするとともに，ステーションのさらなる発展のために主体的役割を担って貢献して行きたいと考える．

(1) 本発表は，西条ステーションの沿革，施設と家畜，教育研究活動，将来展望の順に進めて行く．まずは沿革について紹介する．

(2) 昭和 24 年に農学部系学部に農場を置くことが大学設置基準に明記され，昭和 26 年に福山の大野津農場，川口農場と西条の賀茂牧場に分かれていたものを統合して，附属賀茂牧場が設立された．昭和 39 年には賀茂牧場と深安実験牧場を統合して福山の御幸農場ができた．昭和 61 年には，広大の統合移転と

ともに，御幸農場から西条農場に移転した．平成 14 年には，生物生産学部附属瀬戸内圏フィールド科学教育研究センターの西条ステーションに改組され，平成 15 年には大学院の附属施設となり，現在に至っている．

(3) 西条ステーションの施設と家畜について簡単に紹介する．

(4) 西条ステーションの管理棟

(5) 牧草の収穫作業と学生の実習風景

(6) これは肉牛で，4 月から 11 月まで繁殖牛の時間放牧を行っています．肉牛は，繁殖，肥育，育成も含めて約 70 頭いる．

(7) これは乳牛で，品種はホルスタイン種である．現在，18 頭搾っており，1 日に 450 キロ出荷している．ホルスタイン種以外にジャージー牛も飼っている．

(8) これは最近ペットとして飼われているミニチュア豚であるが，本農場では，医学研究科や生物圏科学研究科で実験動物として利用されている．品種はゲッチンゲン種である．

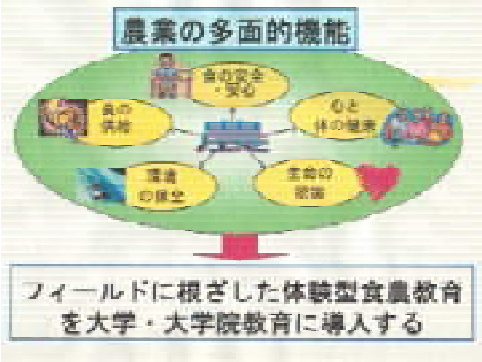
(9) これは緬羊で，体験実習や栄養学の研究に利用されている．品種はサフォーク種で，毛と肉の両方を利用するタイプの羊である．

(10) 西条ステーションの教育研究について簡単に紹介する．

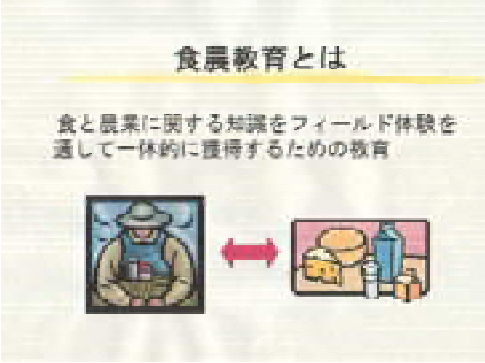
(11) 西条ステーションでは，「食と農が大きく分離されてしまった現代社会」に対して危惧を抱いている．消費者の多くは農に対して無知・無関心になり，バーチャルな食生活を送るようになっている．その一方で，消費者は

食に対する不安感を募らせており，子供だけでなく大人も食生活の乱れが指摘されている．さらに，食生活の乱れから来ると言われている，子供や青少年の犯罪の凶悪化や，食農体験の欠如から，動物や人の命に対する認識の低下，環境に対する認識の低さが指摘されている．

(12) このような状況の中で，農業には，食の供給だけにとどまらず，食の安全安心に関する情報発信，体と心の健康の向上，環境保全など，人間に生きる力を与える，多面的な効果があり，大学及び大学院教育にもフィールドに根ざした体験型食農教育を導入することが必要であると考える．



(13) 食農教育とは，食と農業に関する知識についてフィールド体験を通して一体的に獲得するための教育のことである．



(14) 西条ステーションでは，平成６年から食農教育に積極的に取り組んでいます．その一例として，教養教育としての大地と家畜からのめぐみについて簡単に紹介する．

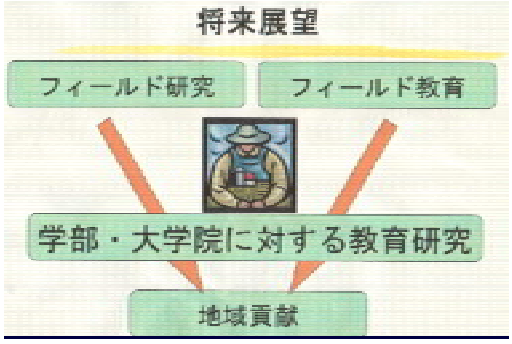
(15) 大地と家畜からのめぐみでは，全学の学生を対象として，西条ステーションのフィールドをフルに活用して，食料と生命への理解を深めさせる教育を 10 年近く行っている．

(16) また，西条ステーションでは，フィールドに根ざした研究の促進を積極的にサポートしており，毎年その成果をセンター報告にまと

めて公表している．

(17) 西条ステーションは地域貢献も活発に行っている．

(18) 西条ステーションでは，地域の幼稚園，小学校，中学校，高等学校，市民による農場利用者は年々増加しており，年間 1500 名以上が見学や体験実習に参加している．

(19) さらに西条ステーションでは，公開事業として農場祭を開催し，毎年 1000 名以上の参加者があり，食と農の関係について積極的にアピールしています．また，毎年センターフォーラムを開催し，地域に関連したテーマをかかげてシンポジウムを行っている．

(20) 西条ステーションの将来展望といたしましては，学部及び大学院におけるフィールド研究とフィールド教育に対してさらなる支援を行うとともに，その成果を地域に還元できるように努力してゆきたいと考えている．